りびんぐらいぶず　令和2（2020）年3月第2号

ご本願を聞かせて戴きましょう

◆伝灯奉告法要　ご親教から

◆私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、自分本位にしか生きられない無明の存在であることに気づかされ、できる限り身を慎（つつし）み、言葉を慎んで、少しずつでも煩悩を克服する生き方へとつくりかえられていくのです。それは例えば、自分自身のあり方としては、欲を少なくして足ることを知る「小欲知足（しょうよくちそく）」であり、他者に対しては、穏やかな顔と優しい言葉で接する「和顔愛言（わげんあいご）」という生き方です。たとえ、それらが仏さまの真似事（まねごと）と云われようとも、ありのままの真実に教え導かれて、そのように志して生きる人間に育てられるのです。このことを親鸞聖人は門弟に宛てたお手紙(御消息第二条)で、「（あなた方は）今、すべての人々を救おうという阿弥陀如来のご本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり･いかり･おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀佛の薬（お念仏）を常に好む身となっておられるのです」とお示しになっています。

◆今日、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積していますが、これらの根本原因は、ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩悩にあります。もちろん、私たちはこの命を終える瞬間まで、我欲に執われた煩悩具足（ぼんのうぐそく）の愚かな存在であり、仏さまのような執われのない完全に清らかな行いはできません。しかし、それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心にかなう生き方を目指し、精一杯努力させていただく人間になるのです。

（Ref 伝灯奉告法要　御門主「ご親教」『念仏者の生き方』［2016(平成)28］年十月一日）］

◆はじめに

第十七回滋賀組連続研修会第五回研修テーマ「環境･格差･貧困などの社会問題と、御門主のご親教「苦しみはなぜ生じるのか」について、当院住職に講師を依頼してこられました。

そこで改めてご親教を拝読し直して見ますと念仏者の具体的行動をうながす親鸞聖人の『御消息』第二条の御言葉が引かれ、連研課題の「地球温暖化等の御言葉」も第六節に示されているではありませんか。

◆苦悩はなぜ生ずるか

御門主の仰せのように、自分中心主義は、苦悩の発生要因の中核をなします。

外部要因では例えば、新型コロナウイルスに罹患して重篤化すれば、患者側一人一人の病死の苦悩のみならずご家族の苦悩を大きくしますので、医療崩壊を未然に防ぐには、患者数の発生を抑えるため、事業自粛まで求められる社会的苦悩に発展しましたが、自粛で感染の発生を防ぎ、医療崩壊を防いでいることは、国民一人一人の配慮が実を結んでいる国家としての日本の素晴らしさです。

ただ介護医療現場では、患者に手を触れないでは御世話ができないという作業上の制約があるため政府の求めに応じて介護側が事業自粛すれば、高齢患者の症状が悪化しかねないという課題が表面化しどうすることもできないと聞かされます（Ref4/23「クローズアップ現代高齢者と介護危機」）。

◆信心正因　称名報恩では道行きは語れない

「信心正因　称名報恩」は、浄土真宗　究極のご法義とされてきましたが、これを固定したままで、お法りをお伝えすることは至難の業であります。

煩悩具足の凡夫に恵まれる信心獲得から浄土往生に到るプロセス(道行き)を明示せず、プラクティス(行動)を明確化するKWを排除しているからです。

これはお聖教をお訊ねしても、念仏者の行動論についての典拠が少ないことに起因していると云われます（Ref 天岸浄圓『無明の酔いをさます阿弥陀仏の薬』p20～21）。

ところが、ご親教に引用された親鸞聖人の御消息第二条の御文には、数少ない念仏者の行動論についての御言葉が示されているではありませんか。

その第一は、私たちは、阿弥陀如来のご本願をお聞かせいただくことで、自分本位にしか生きられない無明の存在であることに気づかされ、少しずつでも煩悩を克服する生き方へとつくりかえられていくことであり、

その第二が、阿弥陀佛の薬（お念仏）を常に好む身へと作りかえられることであります。

◆私たちのなすべきこと

ここまで参りますと、私達のなすべきことが体系的に明らかになって参ります。

第十八願成就文では**「聞其名号（もんごみょうごう）　信心歓喜」**とお説き下さいます。

「聞其名号」とは何を聞くのか、十方世界の無量の諸仏方のお一人である今生の釈迦仏が阿弥陀佛のお名号の功徳を「何と尊いことであろうか」と讃嘆なさいます。

お釈迦様が讃嘆なさる本願の物語をお聞かせに与って初めて衆生は、本願の存在に気付かせていただき、感動に胸揺るがすのです。

お釈迦様の名号讃嘆は、第十七願文に**「咨嗟称我名（ししゃしょうがみょう）」**と誓われた如く、本

願の物語讃嘆（広讃）から名号讃嘆(略讃)にわたります。

お釈迦様の讃嘆行は、七高僧に引き継がれ、妙好人に引き継がれ、わが祖父母（これらを他力の念仏者と略称します）に引き継がれてわが両の耳を揺るがして下さったのです。

略讃を聞いて感激した衆生は、私もまた他力念仏者に随念して（付き従って）「南無阿弥陀佛」と称えたくなります。サンスクリット本に示された乃至十念（Anusmareyus）のお心です。

第十七願に帰ったお念仏は、阿弥陀経の Manasikara に示された如く、精神の集中を最高度に高めてわが両の耳を揺るがすお喚び声となって聞こえて下さいます。

今生の命ある限り、「さあ、一緒に行こう」（平成三十年の報恩講での藤澤 信照先生の御言葉）とお浄土から流れ出て下さった南無阿弥陀仏のお喚び声に手を引かれ、衆生は、お浄土へと続く二河白道（にがびゃくどう）を歩ませていただくのです。

お釈迦様･阿弥陀様の善巧（ぜんぎょう）方便は、愚かな衆生は愚かなままで、お聴聞により何度も讃嘆の御法話をお聞かせに与る程に、何度もお念仏を称えさせて戴く程に聞こえて下さる南無阿弥陀佛こそは、阿弥陀様がここにお喚び声となってお浄土から働き出していて下さるお姿に遇わせて戴いていることに他ならないと頂戴することになるのであります。合掌。

（HPへのアクセス法）　「正覚寺　北小松」、「正覚寺　滋賀県」等で検索なさって下さい。

◆仏教壮年会お聴聞の会　今月度は、新型コロナウイルス対策の為お休み致します
◆仏教婦人会例会　今月度は、お休み致します
◆降誕会（ごうたんえ）法要　今年度は、お休み致します。

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥